間の天罰を云ふものなるを知れば則ち吾人は寧ろ其眞意を此書の都ての形容的詩想的の言語に歸するを可とす、又余は獨り此書に就て言ふにあらず、聖書は全体東洋的にして其各行と東邦の精神と、並に其過實說及比喩と、極めて誇大なりと見ゆるものとを含めり、若し斯る言詞を文字通りに解せゞ其全意を失ふべし。神聖なる記者が月蝕の暗紅色を記せんとするとき月い「血に變せり」と言ふ、聖書を誤る者は此神聖の詩を其眞意に導くの人に非ず、聖書を誤る人は東邦の詩の燦爛たる比喩を獨斷說に固むる人なり、ランス氏は其默示錄の序に於て斯る行爲を「道德的誹謗」と稱せり、されば我主の詞に於るも若し之を文字的に解せば屢み其意義を誤るべし、基督が我父母を嫌ふこと必要なりと言ひたれば、とて實に斯る行を爲すべきか、又文字的に己れの右眼を抉出すべきか、又カノンファラトが善く記載せる一例を擧ん、埃及は聖書に於て一回以上猶太人に對し鐵。爐。たりしと言はれたり、然れども彼等の狀態は彼等が現に「其處に在るは吾儕の爲めに幸なり」と言ひ、且實に其歡喜の爲めに歎せし所の苦難の一たるを免れたり、故に余は主張せん無限の苦と惡との教理は屢々誤譯せられ又常に誤解せられたる比喩より於る東邦の意匠に基くものなりと、余い第十四章に於て世人熟知の句節を考究せしを以て尙は其他屢々引用せらるゝ一節を論じて此章を結ばん。

「されど臆する者信ぜざる者等は火と硫磺の燃る池にて其報を得べし是れ第二の死なり」——(默廿一〇八)

(一)吾人若し其趣意を了解せんと欲せば全く此節の前後の文勢を考察するを必要なりとす、そは大なる白き寶座(廿〇十四)の現はるを以て始まり、彼の大なる日の審判の後に永續する死及陰府(墳墓)と遙に異なり

「火の池に投入らる」を見るべし。――(俗説と甚だ異なり且之と相反せり)

(二)次に下の如き宣言あり、即ち神は人と共に――尊者(セント)と共にあらず――斯の如き人と共に住むと、又其結果として人は神の人民たるべし、神は人民と共に在り、人民の神たるべしと云ふと是なり。

(三)最早死も悲も呼も苦もなしと明に言へり、こは限なき陰府を斷定するより寧ろ之を否定し、加之力を極めて斯る教理を否定するものにあらずや。

(四)次に寶座より榮光ある約束を以て聲あり「看よ余れ万物(或物に非ず)を改造さ」と、又此約束に著しく語勢を加へたるに注意すべし、蓋し之よ注意を惹く爲め「看よ」なる語を以て發し「此等の語は眞實なり」と權威を以て結へり、之が爲めには一も理由あらざりしが、斯く示現全体の中心點(即ち萬物を改造す)として此に注意を惹くよあらざるか、然れども是れ亦世俗的信條を否定するものなり。

(五)斯る約束と密接して甚だ形容的なる火の池の恐嚇あり、恐らく是れ此に投入せられたる者の滅亡を指すものなり(余は斯く信ぜざれども)と論する者あらん、然れども上文に約束せられたるもの――(最早叫も苦もなし云々五〇四)よ反し、無限の苦難を敎ふるとして之を解するは全く爲し能はざる事なり、故に此句節の反復せる約束(三)及(四)を看よ)が極めて形容的なる恐嚇*の語と其完全明白よ於て相反するを觀察し、又神の審判の眞意と聖書の全精神(加之其萬物復興の特別なる宣告)とを觀察して余れ下の如く結論せん、曰く茲に敎へらるゝ所のものは其間する際清める所の火なり、火は神の奥妙なる方法に於て萬物を改造する一力なりと。――(第二の死に於ては第六章三百八十九頁を看よ)

*惡魔い虚王(ヲロ及羅馬の諸王)及虚妄の預言者(廿〇十及十四)と共に火と硫

硫の池に投入られ「死」と「陰府」の如き二箇の虚形物も亦其中に投入らるてふ比喩を以て吾人は爲す獨斷說を立るを得んや。兎に角此の火の池は地上に在るなり、而して其後直に吾人は其地の滅されるまで、最早死も兇詛もなき新しき天と、新しき地のあるとを見るべし」――(カノン、フアラー)

故よ默示錄の示す所い一も無限刑罰の敎條に援助を假さゞるを知るべし、若し聖書を精密に翻譯し正當に解釋せば其中に一句も斯かる敎理の存在せざるとを信ず、余は人を罪より嚇し得べき唯一の力い此地獄の火の敎條と相連結せりと正に信する者に向ひ、此事を斷定するは人間の經驗力に背反せりと記臆せんとを乞ふべし、蓋し何れの時代を問はず經驗の確示する所に據れば、人を罪より嚇すは刑罰の大さにあらず、其合理なると其加刑の確實なるとよ在り、(五十頁)之よ反し從來無限地獄の敎理ほど罪障の實際的刑罰に於る信仰を甚しく動搖したるものなし、是れ(百十一頁を看よ)何人も其行爲に依り實に之を信すると示したる者おちざればなり、是に由り此敎理を敎ふる間は未來刑罰の全問題は諸人の爲めに不分明且不確實となるべし、斯くして一聲の秘密なる不信を養成し、其不信は此特別の敎條に始まり且必ずしも此に止まらずして天啓宗敎の全体に影響を及ぼすべし、而して尙ほ世俗的信條を敎ふる者は斯く吾人本性の道德力を不信仰の味方に編入し、精銳の兵器を懷疑家に供するのみならず、尙ほ之より甚しきものあり。斯く彼等は人よ敎へて口に信條を唱へしむるも、精神と生活とは之に最要なる信義を盡さず、是れ余の知らず識らず認むる所なり、是を以て耶蘇基督の福音い全く低落して信用せられざるに至るべし、蓋し人若し此種の敎理が口唇に主張せらるゝも實際に拒否せらるゝを見ば(實際上全く信を措き難き故に)必ずや自稱信仰及實際懷疑の敎訓を基督

教眞理の全系に適用するならん。

余は聖書に訴ふるを畏れざりしと信ず、余は重ねて言はん吾人は此訴ふ依り一層大なる希望を益せんことを求むと、然れども尙ほ或疑を懷き或抗論に全く應答せずと思ふ者あらば余は左の疑惑を想出すべし、即ち此等の要點に於て數學上の確實を求むるは決して得べからざる理證を求むるものなりと、合理的人士は神の存在に就き數學的證據を期望せず、神學上の大問題は一として聖書の論據に於て多少外見好き或疑問に遇はざるはなし、外見よき抗論の爲めに餘地を殘さゞる所の一層大なる希望の顯示を求むるは、合理的人士が之と等しき場合に於て求めざる所のものを求むるなり。

終りに臨み余は屢々注意を漏す所の有味なる一事を論ずべし、口碑的信條が今論じたる章句に附したる解釋を以て議論の爲め暫く精密なりと假定するも、尙ほ無限刑罰を證するに足らず、「聖書には等しく相反する二種の句節あり、余は都て明白となるまで待ち望まざる可らず、而して其間に一も結論を組立るを得ず」と云ふは或は合理的の口實たらん歟、然れども「萬物の復興を敎ふる所の句節を聖書より刪去ちざる可らず」と云ふ爲めは公平なる理由と爲す能はざるべし、是れ屢々忘却せらるゝも否定す可らざるものなり、而して假りに此事ありとするも、口碑的信條の爲めに多數の要點を打破せり(一)何となれば人若神は愛なりと承認し、又何人も神の殘忍なるを認めざる故に、此假說い全く一層劣りたる說の爲め眞正の說を變ずるものなればなり(二)何となれば此見解は萬民を救ふべしと宣言せる神意と符合すればなり(三)何となれば神に相應せざる事を敎ふる經文は文字通りに理會すべからずと云ふは神學家の爲めに爭ふ可らざる金言なればなり、此理由に依り

彼等は神は心を殘忍にし又害惡を創造すてふ經典說を文字通りに信せざるなり、然れども若し然りとせば、吾人は普通の解釋に於て恐るべき殘忍の行爲を神に歸する所の章句を文字通りに承認せざるを得ざるは何ぞや(四)蓋し普通の說ゝ殘忍なるのみならず又二元論となるべし、然るに其反對說は善は常に終に惡よりも强しと云ふ大原理に基けり(五)蓋し威嚇は完ふせられずとの意義にて約束を結べり、是れ威嚇完成せられずとも何人も之を悲しまざればあり例へば威嚇の最も精密明白なりしニネベの例を擧ん、而して余は口碑的信條の辨護者が執る所の理由に據るも、彼等の結論を證明すべきものあるを知らず、彼等が執る所の聖書解釋の維持を可らざるを示さゝるゝに當り、彼等焉んぞ能く之を證明するを得んや。

第十章　約說及結論

「小巡禮者合掌し熱心の容貌を以て聽き且言へり、曰く、されど吾儕の父が惡の爲めに敗らるゝいとは決してある可らず、そは未だ全世界に知られざる歟」——*The Little Pilgrim.*

「此語奇異にして屢々恐るべし、然れども恐るゝ勿れ万物終に正に歸すべし、安寧は不安に勝つべく、信仰は恐怖に勝つべく、秩序は混雜に勝つべく、健康は疾病に勝つべく、歡喜は悲嘆に勝つべく、愉快は苦痛に勝つべく、生活は死亡に勝つべく、正は邪に勝つべく、万物終に善其さなるべし」——*Madame How and Lady Why.*——C. Kingsley.

宇宙神教說(ユニヴァルサリズム)の問題は總て誤りたる基礎、即ち恰も之ゝ含有せる要點ゝ重なに或は全く人間の無限苦難ありしが如き基礎に就き推論せらるゝなり、夫の獨斷は凡ての道德性に對して厭嫌すべく且排斥すべき者なりと雖も、是れ此爭論の決勝點にあらず最緊要の問題は世俗的信條

は害惡の永存を敎へ以て惡魔の勝を得ることと罪の終は神に打勝つことを指示するものなりと云ふは在り、此の如き吾人の墮落せる性質の腐敗又は卑劣をして永存せしめ、人間の最も不潔なる最も厭ふべきもの即ち最も頑固なる罪が神自身の如く永續すべきことを示し、道德上厭嫌すべきものに不死の品位を與へ、無窮の叛逆と最後の混沌とを敎へ、惡鬼會堂を永久の事實として樂園と共に並立せしめ、而して其汚穢の深淵を瞰て之を呼んで耶蘇基督の勝利と云ひ、又之を稱して神は「圓滿」なるべしてふ約束の確證なりと云ふを憚からざるものなり。

今家内の一例を擧げ余の意を一層明瞭ならしめん、一家の主人が万事に就き潔白を貴び、其嗜好を滿足せしむべき充分の力を以て各種の汚穢物を一方の隅に掃除するに當り、其眼下に於て永く腐敗すべきものは果して何ぞや、啻に然るのみならず中に就き最も汚穢なる物(即ち最も頑固にして且甚だ惡しき罪)を永く腐敗せしむるも、其掃除し清洗する所のものは正に是れ道德上の汚塊中最も腐敗少なく最も厭嫌するに足らざるものなり。實に流俗の神學に據れば其當に然るべき所以は此道德上の汚塊たる甚だ大なるを以て永續せざる可らずと云へり。」

余が甚だ明白に說たる所以は吾人の反對者が嘗て敎へしと又今尙ほ敎ふることの何たるを確證せざればなり、余が甚だ明白に說たる所以は彼等は神を人間の水平線下に落して道德上の凌辱を致さしむればなり、斯る敎義は正に諸人をして神を嫌はしむるを致せばなり、其中に含まれたる(十二、十三、十四、十五、十六頁)至大の道德的結果は就き種々痛嘆すべき遁辭を設くればなり、懷疑論を表して之を增進せしむればなり。」

吾人の反對者が基督の來て明に破壞(約壹三○八)せんとせし所の惡の永續することと基督の勝利とを調和するは當り、自から感ずる明白なる

混雜は實に教訓と爲すべきものなり、されば或(適當の)人は不幸者が神に對する抵抗は唯「受動的」なるのみ又其惡は「不活動的」なるべしと辨解せり、然れども受動的抵抗は(若し用語に矛盾なくんば)或種の抵抗にして不活動的惡は或種の惡なり、而して双方の場合に於て基督の眞目的は失敗を來すべし、頑固なる罪の最惡なる種類は(爲めに地獄を設けしめたる)最も活動的なして實に活動的たるや明なり、故に此等が不活動的となると云ふは即ち地獄が治療的勢力を行ふと云ふに仝じ、而して地獄若し治療的ならば吾人の反對者は如何して一層大なる希望と近接するか、又余は彼等に對し此惡の無窮たるを得べき所以を明言せんことを望む、デ、クインセイ曰く無數の生存物は神に停泊所を有するを以て恐らく神の時代 *divine aion* を共有することを許さるべし、然れども神の爲めに如何なる利益を虛僞と不潔と惡意とに附し得るか(中略)若し惡の永遠の生活を想像するに當り、之に分與せられたる自存の力を以て、善を裝飾する者と同樣に永遠なりとせば、則ち其惡は惡たらざるべし」と、(神學論)而して既に述べし如く零落の經過は如何して無限たるべきか。「余は熱心を以て答へん、吾人は基督の勝利を承認すべきか、又は惡の勝利を承認すべきか、只此取捨如何に在るのみ、此二者の外には言ふべきものなし、當時諸人の敎ふる如く、失はれし者の數を減すると又は彼等の終に潰亡せらるべきを斷定するとは一も利益を與へざるなり、凡て斯る變化は世俗的信條の中心たる困難——惡の勝利——を全く感動するとなくして存せり、單一の場合に於ても永く其汚染を現はせる罪は勝利を得たる罪なり、神が除き得ざりし(又罪人を滅す外に方法を有せざりし)罪は凱旋したる罪なり、又勝利を得たる死なり、又屢々辨護せられたる忘念は實に奇異なり、口碑的信條を敎ふる一層

愚昧の形狀を捨るとも之に對し凡て實際の異論を爲すとき遭遇せる忘念是なり、余は之を左の如しと假定す、凡ての改心の機會經過すると雖も尙ほ吾人を永く罰せしめよ、然れども許多の人を驚す勿れ、文字通りの火を說く勿れ、こは甚しきに過ぐべし、苦痛を保存せよ但し苦難を最高の部分に於て心靈上の性質――に適用せるを注意せよ、無限の愁嘆と悔恨とを以て精神を苦しめよ、神に像りて造られたる者即ち己れの爲めに神の子を死せしめし所の者を永く惡魔に交付せよ、人の精神を無限の惡に交付せよ、そは永遠無窮に續くのみ、何人か之に不平を唱ふる如く不合理なる者あらんや」と。斯る辨解を爲すとき、又は墮落の面積を減ずれば無限の惡に對する凡ての異論を免るべしと想像するときは、人の心意は偏見の爲め深く害せられ、道德の力は一部癱瘓せられざるを得ず、是れ恰も數學の方式を以て道德上の問題を解釋し、又は其犧牲の數を減じて惡魔の勝利を廢棄するを得しが如し、基督をして死せしめる一靈魂の永く惡魔の掌中に在る間は、何時までも惡魔は勝利者たり、何物たりとも毫も其事實を變更するを得ず。

茲に尙ほ緊要なる論點あり、ビショップ、バットラーは試煉は吾人の神に對する道德上の關係の適當なる解明なりと敎へんと欲せしや否や極めて疑ふべし、然れども實際上彼の大名が(言語に於て然らざるも事實に於て)神は元來審判者なり又は其受造物の道德的知事なりと敎ふる者に憑據を(大に)與へしとは確實なり、余は專ら無言の害を爲しつゝある觀念を反駁すへし、此觀念は不幸の遺物 *damnosa hereditas.* にして羅馬人の嚴刻狹猛なる法律的精神自然に殘忍に傾き以て福音に遺傳せしものなり、故に愛なる神は實際に於て全能の羅馬州長に變じ、人類の救主は羅馬知事の衣服を被るに至れり、目前に示さるゝものは慈悲の法

廷にあらずして刑罰の法廷なり、不撓の法律と不屈の法官と萬事を支配し、到る處恐怖の感覺を弘布せり、愛は從者にして罪は中心の事實と爲り、先づ來る者は慈惠にあらずして犯罪なり、吾人の父なる者は凡て實際の目的に於て消滅し、之に代て位置を占むる者は尊大なる工作長若くは道德的の知事若くは會計總監なり、神の愛と神の父たることは數多の言語に於て否定せられずと雖も、此等は唯屢言語に於て承認せらるゝのみ、夫の教理い萎縮衰弱麻痺して殘存し、恰も我國に於て正當の國君が儀式上廢位せられさるも傀儡に過きさる待遇を受くる如し。斯の如き教法は自から福音と稱し、最大なる名稱を維持するを示し、又數千の說教壇よ於て敎へらる(屢々軟化せらるゝも其本質は同一なり)と雖も是れ僞物にして眞の福音に非ず。

慘然愉快なる基督敎は歡喜と凱旋とを證明し得る凡ての表徵を以て古墳(二百九頁)の暗澹たる隱所を被へども、毫も暗黑苦痛の形像、且十字架にも位地を讓らざりしものなるが、是れ今何處に消滅せしか、何故よ然るか、蓋し此等の人々に對し耶蘇基督の勝利は實に信仰せられしものにして實に確認せられしと他に冠たり、蓋し彼等は死と其刺が眞實に一般に勝利よ呑まれしとを信せり、故よ彼等は基督を描くに强壯眞正、完全なる死及地獄の制服者を以てせんと欲せり、無窮の死、永久腐敗する道德上の汚物、斯の如き物は復興の創造に於て如何なる地位(彼等の思想は斯の如し)を有するか、何故に宗教的描畫の基督は頭を垂れ苦悶の容貌を顯はし斯く悲むが、是れ彼は其失敗の近づくを悲しむ爲めか、何故に吾人は蘇生して凱旋せる主の形像を吾人の教會より斯く一般に追放せしか、是れ吾人が心中に屢々彼の失敗を感する爲めか、陰府に降り牢戸を開て不從順の死者を生活に復すが如き高尙、温和而も强

健なる勝利者基督の現像は何處に行きしか。

然り「彼等は吾人の主を取去りたり、吾人は彼等が何處に主を置きしを知らず」彼等は「吾人の父」又「凡ての父」を取去りたり、而して吾人は何處に彼を求むべきかを知らず、彼等は麵包の代りゑ石の如き信條、慈悲なき刑罰、望なき地獄、終なき惡、失はれたる者及苦しめる者の爲めに憐憫なき天國及下に言ふ如き世界を吾人ゑ與へたり、即ち此世に生活すると は思慮ある者に對し眞に不幸なり、其故は彼等が自身を愛する如く愛せべしと命せられたる基督の數多の兄弟姉妹の爲めに只無限苦難へ赴くの門戸前室あるのみなればなり、吾人は實に自からカソリックと稱すれども全英國一千の說敎壇中一として昔時のカソリックが普通に敎へたる所の(百九十三頁)地獄より死者を免れしむる福音を敢て大に告知せんとする者なし、又大工作家が自身の形に像りたる改造の如き、治療の如き、一層幸福且一層高尙なる死の見解、即ち數多の有名なる人の敎へたる意味ある說は今何處に消滅せしか(三百十二頁)如何なる權利に依り吾人は古代の信條に不幸なる一句「余は惡の永遠を信ず」を眞に附加せしか(三百九頁)何故に吾人は一層高尙なる復活說を其眞質より復興の一法なりとして聽聞せざるか、(二百四十八至五十、二百七十六、二百九十八及九、三百二及三、三百七十一及八十二頁を看よ)何故に古代の敎會に於て宇宙神敎(ユニヴァルサリズム)の弘布せる要件を確知せざるのみならず敢て之を否定せるか、何故に敎會はニサの監督(二百四十七五十五頁)及數多の聖徒が敎會の最盛時に於て自由に敎へたる一層高尙自由なる敎義を拒みながら、ヒッポの監督より來りたる殘忍不自由なる亞弗利加主義を承認するを悅ぶか。

余は外形上の承認或は拒絕の有無を云ふにあらず、オウガスチンの主

義が實に一層高尚なる眞正寛大の教義を追放して凡ての羅甸基督教を棄てたるを云ふなり、されば神若し人を永遠に罰するとせは必ず其取るへき一階級あり(成るへく斯る說を辨解せん爲めに)卽ち人ゞ神より受け又神の子が永く取り被りたる所の性質を貶し誣ふるもの是なり、されば又降生は其本位を失ひ、眞正なる創造の教訓湮滅し、各人が神の形に像られたる事實は廢せられ忘却せらるへし。聖、アムブローズ曰く何事に依らず神の像より於る如く貴重なるものあらんやと、夫の選民は「尿及汚泥を以て被ひたる癲病人、彼等の父の腰に腐爛せる潰瘍なり」——*Answer to Travers*, § 22. 若し卓見なるフーカーさへ斯く言ひ得るとせば、不幸の酵母實に深く穿入せりと謂はざる可らず、實に其遺跡は今日に至るまで最も明なるものなり。之を再言せんに如何なる教理も試煉に於る如く聖書に根據なきに拘はらず(又凡て高尚なる教父の神學にも之を支持するものなきに斯く弘く流布したるもの未だ曾て之あらずと信ず、實に是れ聖書の產物にあらず、預言者又は使徒より來りしにあらず、哲學者より來りしものなり、而して何人も之を聖書より證明し得ざるも流布せる書籍に於て其如何を知るを得べし、教育に試驗の原素あるや疑なしと雖も、神若し吾人が神に對する道德上の關係に於て、其他の万物を支配する事實は神の子輩としての人間の教育なり、實に教育は試驗なくんば進ひを得ずと雖も、吾人は教育さるゝ爲めに試みらるものにして、試みらるゝ爲めに教育さるゝにあらず、父の愛の特有本質は其消滅す可らざるに在り、余若し單よ試驗の爲めに茲に在りとせば、若し神の余に於る關係は猶ほ債主の負債主に於る如しと爲ざば、余は言語上彼を父と稱し又言語上愛を彼に歸せべしと雖も、實際は彼を父と看做す能はず。——エルス

キン氏「神の目的」

如何なる合理家も神が眞に吾人の知事たり又吾人の法官たるを疑はずと云ふ事を記臆せよ、然れども口碑的信條の描出する如き知事と法官とは吾人の拒否する所なり、吾人は父が常に(實際に)法官に於て失敗するとを拒否もべし、吾人は此等の教師に向ひ福音のアルハベットを正しく學びたりやと問はざるを得ず、彼等若し之を學はゞ果して斯の如く語るを得べきか、蓋し神は「愛するもの」(ラーヴヰング)なりと云ふい實に愛をして正義又は憤怒の如く單に一の屬性と爲すとなり、神は愛。あり故に愛するものにあらず、是れ最要なる區別とす、此區別は其本質に於て基督全般の企圖に影響するものなり、獨り此誤謬あるのみならず吾人の反對者は愛の實に何物たるを理會せざるが如し、若し然らずんば應報の解明を爲すに就き吾人を責むるを得ざる筈なり、蓋し吾人は神は愛なりと主張すればなり。

實に吾人は此神則を認むるを吾人の反對者よりし遙に眞實なり、實に彼等人の說に據れば神の規則は終に望なく惡の爲めに破壞せられ、神は決して之が撲滅を成し得ざるべし。

蓋し眞正なる(神の)愛の嚴肅不變的側面を忘れ、又此愛の實に不可消滅的を忘れて愛の本質を單なる善性と混もるときは、抑も之を誤解するものなり、惡なる中心の事實を以て全能の監察者たる父(單に試業の觀念たる彼の訓練の爲めに)に代用する如き誤謬に基きたる福音を用ひ而して若し其他凡ての殘餘を度外に附せば實に驚くべき事なり、人若し中心は此地球にして大陽に非ずと數へらるゝときは誰か天文學を隆盛にすべきを期もるを得んや、道德界に於るも亦然り、余若し中心に罪を置きて愛を置かずんば、余は凡ての運動を麻痹して全く神の秩序

を轉倒すべし。

基督教々師が只神は愛なりと認るのみにして之より適當なる結論を導かざるは悲しむべき事なり、基督教の講壇ろの數多しと雖も、神が通例の人間の父に等しく善良なりと云ふ事さへ說敎する者甚だ稀なるは悲しむべき事なり、恐らく公平に視察せんと欲する者に取りては凡ての事實中最も悲しむべきものならん、斯く說敎する者は神が其受造物の多數(又何物にても可なり員數は此處に何の關係あらんや)に向て働くべしと言ふとき、又神が此等の不幸者に生命の不運の賜を强ひ、斯詩句の如く「彼等を生誕に呪ふ」に當り實よ働きたるとき、當に働くべき人間の父母の感觸を自から害するならん。

又此問題を神の立脚地より立論する者稀なり、實に吾人は神靈に依り古代の預言者に傳へられたる深奥の敎訓「汝等の戰に非ずエホバの戰なり」(代下廿〇十五)を要す、此疲れて久しき罪との戰い其最後の結果に於て吾人の戰に非ず神の戰なり、是れ實よ「神の救」なり——(同上五〇十七)現今に於ては凡て此事を忘るゝを最深の神學なりと考へ、又人間の如き生存物の罪に汚れ懦弱にして無知なる意志に起る所の此恐るべき戰爭の結果を止むるを最高の知慧なりと考へたり、彼等は神學の代りに人類學を、神の學の代りに人の學を吾人に與ふ、吾人は殆んど神意を聽くを得ず、蓋し推量し得る如く其意は斯く力を盡して普及救濟を指示するものなり。

然れども此疑問は今尙ほ遺存し而して適當の答辭を得るまでは將來も尙ほ遺存すべし、神は實よ主たる者なるか、又罪は神を永く其自家の如何なる部分よりも逐出すべきか、カルヴヰン說を排斥するは十分容易なれども神の主權を排斥するは聖書を排斥するものなり(六十及六

十一頁)道理の審判を排斥するも亦之に等しきにあらずや。

乞ふ讀者よ、恰も神性の物体に對し成し得へき惟一の勝利が彼の敵の改宗よりあらざりし如く、又地獄に於る惡の永存が彼の失敗にあらざりし如く、若し基督其敵を地獄に幽閉するとも、之よ勝利を要求する詐欺的辯解に注意を可らず。然れども其實口碑的信條は本質上若くは正式上に於て二元論たり、即ち至高の神(名義上)あり、又之と競爭する半神の惡魔(サタン)あり、茲に相爭ふ二帝國ありて正に同じく永續するの運命を有せり、中世紀に於て吾人は現る三位一体の競爭者即ち惡の三位一体を描出するを見たり——(Didron, *Iconog. Chret.* ii. 23.) 斯く人の心意を支配し、尚ほ惡魔は殆んど全能にして實際遍在なりと信する者を支配する所の信仰より成りたる獣示は奚ぞそれ深奥なるや。

乞ふ進んで聖書を講究せん、此控訴より長縮すべき理由を有する者は宇宙神教徒(ユニヴァルサリスト)にあらずして無限の罪、失敗の救世主、勝を制する惡魔を辨護する者なり、彼等は聖書の教義を目視せざる者なり、彼等は万物復興の反復せる契約を輕視する者なり、彼等は其口碑に依り聖書をして無効ならしむる者なり、彼等は聖書に對し古代の偏見より害せられ、殘忍なる口碑を以て潤浸せられ、其恐怖に對する長き慣習に由り心意を痴鈍ならしめたり、故に万物の復興を明白に斷定するに當り聖書の眞正なる力を實に知り能はざる者多し、是に由り痛嘆すべき遁辭を設け、正直に(余悅んで之を許す)但し蒙昧に聖書を顚倒する狐疑の論法を設け、即ち万人の基督に引るゝは人類の半分が惡魔に引かるゝの意なり、万物の基督に依り調和せらるゝは万物の半分が終に寂滅するの意なり、と教ふ。世俗的信條の意見即ち神は聖書に於て自個の失敗の事跡を詳說せりとの竟見、又罪は神の爲めに强きに過ぐるを證せりとの意見は

全く根據なきが如し、聖書は斷じて神の子が其至極の盡力に於て失敗せると、又罪が永遠の墮落に沈むとを說きたるものにあらず、始より終まで神は惡を制服し、(生命は各種の死に打勝つと)慈惠は罪よりも强きことを說きたるものなり。

余は重ねて、一層大なる希望が强く且充分に應報の敎理を受容せると、を述べん、宇宙神敎(ユニヴァルサリズム)を以て罪と不幸と應報との嚴格なる事實に對せるを拒む所の軟弱なる系統なりと爲す者は極めて不正なり、吾人は凡ての不悔改者に未來の罰の畏るべく確實なるとを斷言せん、而して之は却て承諾の機會を有すると遙に多しとす、是れ良心を傷ざる形式にて敎ふればなり、又吾人い敢て有限の罪が無限の刑罰を受くべきとを敎へざればなり。一層大なる希望の弘布を妨げしものは罪の不適當なる意味を含み、又假令ひ其受造物の幸福を確保せるにせよ神聖を缺きたる懦弱放恣の一体の如く神を描寫せる所の全く無根なる意見よ若くはなし。實に罪を輕視する者は吾人に非ずして世俗的信條を敎ふる人なり、單獨の場合に於ても又何等の理會し得べき變形に於ても、地獄に於る無限の罪を敎ふるは則ち惡の勝利を敎ふるなり、吾人を以て之を見れば是れ神を讒誣し且眞理に違ふものなり、讒誣とは終に罪に服從せるとを神よ歸せるを以て云ふ、眞理に違ふとは神の全能は其最も必要なる時期に於て敗壞し苦と惡とは永く暴動腐敗せるも、神の愛と純潔とは全く溫順に安んずべしと敎ふるを以て云ふなり。

玆よ吾人は問いん、此畏るべき罪の秘義に少許たりとも光明を放つを得べきか、余は答へん凡て實際の目的の爲めに爲し能ふべき道德上の惡に就ての意見只二種あり、一よ曰くそは神自身の如く無限なりと、是れ實よ二元論なり。一に曰くそは一時にして神の奧妙なる計畫に於て

唯一層高尚なる目的に供する爲めに許されたるものなりと。

*之を二元論の特に惡しき形体なりと謂ふ可らざるか、蓋し善靈は自から永く續くべしと知る所の惡の之に進入するを自由に許せばなり。

實に此道德的害惡の說は固より聖、トーマス、アクイナスの說なるが如し、「彼い受造物の位置を以て罪の誘引に依らざれば其本然の性質に進む可らずと爲せり」——(ニアンダー氏敎會史八章二百十六節)故にこは受造物の發育に於る一階級なり、而して之に就き最初の事跡に於て傳へられたる一の暗告あるが如し、是より由り人は恰も眞の墮落は昇登を含む如く「吾人の一人の如く爲りし」と云はれたり。

*アレキサンドリアのクレメントは「不從順に依り人を造りたりとしてアダムを說くべき此意義を以てせり」——*Adm. ad gent.*

聖書の斷定に據れば、神は萬民に恩惠を與へ得んが爲め之を不服に閉鎖せり」と。玆に大胆に重きを置きたるは(一)神の事業にして、人の意志にあらず(二)罪及救の一樣に遍きと、二者共に等しく純全にして普及なると(三)然れども罪は唯救に導き救を含むとして許さる、而して斯く吾人は人が罪を撰むも撰まざるも隨意にして純潔に起つ所の準備を見されとも、惡の世襲遺傳に對する(有効の)準備を見るなり。是に依り純潔は凡ての者に成し能いさる事と爲り、是に依りアダムの各子は神の計畫に於て不服(罪)の中に入かこめり」此準備い各人に對する慈悲の一定の目的に於る外善愛なる父の本分に於て不可解ものなり。余は此深奥なる秘義に就て言ふへき新解釋を有すと充分假定せされとも、若し聖書にして眞に神より來るとせは、則ち聖書に對する崇敬は聖書中吾人自身の說に適合する部分に對する崇敬なりとの理由を以て、左の著しき語句を切論せんとを拒む(殆んど凡ての解釋者が爲す如く)所の答辨を爲すを得ず、此等の語句は實ゝ全く放逐せられたるものなり。

「我ハエホバなり、我は平和を造り又禍害を創造す我エホバ凡て此等の事を爲す」――(賽四十五〇七)茲に語勢を加へて重復せるを注意せよ、蓋し眞の崇敬、眞の正直は此等の語を摯實に承認せんことを要す、又彼等ハ只其一般の教義のみを守らず、例へば惡魔が神前に現はれ神よりジョブを制する力を受る時の記臆すへき有樣と、吾人がエホバより(母上十六〇十四、十八〇十、十九〇九)惡靈に就て讀む所の語句を擧ん。更に神は虛言の靈よ對し「出て然なせへし」と言ふと現はされたり、又神は虛言の靈を預言者の口に入たまへりと言はれたり(王上廿二〇廿三)士九〇廿三に於ても神は惡靈を送れり。余は理論を述ぶれども經典を引用して崇敬の辨解の下に之を說明し去る事に反對せん、凡て此外に吾人は左の如く反復して言ふを見たり、「神は人の心を剛復にし其眼の見んことを恐れて之を閉ぢ其耳の聽んことを恐れて之を掩へり」――(出六〇廿一、七〇三九〇十二、十〇一、申二〇三十、書九〇廿、賽六〇十、十九〇十四、廿九〇十、六十三〇十七、耶十三〇十三、廿〇七、結十四〇九、廿〇廿五、歷三〇六、詩百五〇廿五等を看よ)斯の如く句よ句を重ね行に行を重ねて言へり、他處に於て文字通りの意義を主張するその人が凡て此等を掃去んとするは最も怪しむべし、彼等曰く「此等は神に不相應なるを以て之を强ふるは惡し」と。それ然り、果して然らば乞ふ汝が一原理を以て固く且弛く伸縮す可らざることを記臆せよ、汝若し彼等が神よ不相應なる爲めよ明白なる經文の一塊を掃去るとせば、夫の明瞭を欲き比喩曖昧に充ち且通例解釋する如く如何なる適宜の人類にも(余は神に就て言はざるへし)不相應なる殘忍の經文(無限の苦痛を證する爲めに引用せる)を掃去る可らざるは何ぞや、乞ふ其理由を說明せよ。注視せよ余は彼等を掃去るを望まず却て之を正しく解釋せんと欲す、然れども吾人の反對者が

自己の主義を固持せざる(五百十三頁)事を重ねて示すへし、加之彼等若し神に不相應なる爲め經文を掃去るときは又前後矛盾すべし、何となれば彼等ハ是ヨ由り口碑的信條が殆んど常に實際に於て且數々言詞に於て否定する所の神の方法及宗教眞理を判別すべき吾人德義心の能力を斷定すればなり。(廿六及七頁を看よ)

又吾人は舊約書に於て神は其爲さんと欲する所のものを爲すとして現はされたりと言ふを得ず、蓋し新約書ハ此點に於て語勢を强めて言へり「彼は剛復にせんと欲する者を剛復にせり」——(羅九〇十八)「彼は衆人を不服の中に入かためり」——(仝十一〇卅二)「神ハ彼等に蒙昧の精神と見る可きざる眼とを與へたまへり」——(五〇八)「神彼等が誑を信せん爲ヨ迷惑をして彼等の中に働かしむ」——(撒後二〇十一)是れ聖、ポーロの語勢を强めたる證言なり、約翰も亦猶太人は神が其眼を盲にし其心を剛愎にせし爲め信ずるを得ざるべしと云ふ以賽亞の言を復說せり(十二〇卅九及四十)我主も亦言へらく神は或事を智者に隱せりと——(太十一〇廿五)又彼は聽者が見ても悟らざる爲め譬を以て說けりと——(可四〇十二、路八〇十、參照彼前二〇八)聖書の讓らず憚らざる語調は頗る著し、即ち到る處そは神の手を示し又事々物々神の目的と意志とを寫せり、凡て之を解き去るは聖書に對する虛妄の引證なるが如し、實に光は思慮ある心意に對し靜に此等の苦言に抗するより來る、聖、ポーロも附加して曰く律法を立るハ罪を增さん爲めなりと——(羅五〇二十)律法は「過を造り(仝四〇十五)罪或ハ過を現はし(仝三〇二十)惹起し(仝七〇七及十三)增す(仝五〇二十)——(ライトフート氏加三〇十九)彼附して曰く是れ聖、ポーロが律法の功用に就ての主要の概念なりと。

吾人は之を避るを得ず蓋し聖書に於て往々人は自身の心を剛愎にすと言

はれたればなり――勿論そは大抵眞實なり。

茲に余をして簡短に適當の引證を以て約言せしめよ(一)律法を立るは「罪を增さん爲めなり」又律法は吾人の「師傅」(加三〇廿四)なりしとの事實は惡の敎訓的狀態を告知せり、吾人は創三〇五及廿二の所說を一層善く理會するが如し、新鮮の光は「神が衆人を不服に入かこめり」と云ふ有味の詞を照す、是に於て受造者の虛空に歸せらるゝは其願ふ所に非ず、然れども同一の希望を歸したる彼に由てなり(二)神の主權へ到る處に追索せらるべし、此主權が愛の主權なることを見失ふ由り誤を起すなり(三)又巧に言へるあり曰く「純粹の惡」なるものなし「斯くの如く善道の氾濫も貪慾及罪其物に限らず」――Emerson on Circles. 英國の大家曰く「惡しき者は善の靈魂あり」と(四)吾人は聖書に左の如く暗示せられたるを見る、曰く許容せられ且制服せらるゝ惡は依りて或ものを得べし、此ものたる他の方法よりては恐らく得る能はざりしものなり、例へば「一の悔改せる罪人には悔改するに及ばざる正しき人よりも九十九倍多き歡喜あり」而して若し天に於て多くの歡喜あらば同一の原因より地にも多くの愛あり「蓋し少しく赦さるゝ者には少しの愛あり」(五)罪は數々無知の結果たり、此考は果して那邊まで及ぼすべきか、余之を決定せざれども凡ての罪には*無知の原素あるに非ずや。

*余の判斷に於ては凡ての場合に於て此無知を邪と稱するは眞正ならざるべし、吾人が圍繞する惑の網細工は斯く廣大なり、――哥前二〇八を看よ(四十二頁に稍不精密なれども引用せり)ニサの聖グレゴリ曰く「罪は大抵眞に善なるものに就き判斷の錯亂より之を犯すものなり」と――De mort. Or. ii. p. 1049.

(六)罪を犯すに當り(若し斯く言ふを得べくんば)未熟の材料は數々德義の實行に於ると同一なれども惡道に轉せらると云ふ事を吾人は忘る

可らず、エマーソン曰く「道德上の不具は不適當の善情たるに外ならず」と、余は此處に於て罪過を確然主張したれども犯罪に要する性質と同一のものは若し正しく用ふれば數々大に德義を爲せしや眞實なり。(七)以上の考察の價値如何ゝ拘はらず一層大なる希望は罪を維持すべき理論より毫も恐るゝ所なし、人間の罪に就き寬裕なる見解を取れば是に依り無限の刑罰を排斥すべく、甚だ嚴刻なる見解を採れば神に對し此恐るべき敵對の永續は解す可らざる事と爲るべし。

(八)尙ほ一の考ふべき事あり、創造ゝ神に對し有限の關係に入り神の企を一定の限界ゝ屬せしむるものなれば、恐らく有形上及德義上の惡は或意味ゝ於て避く可らざるなり、而して此意を以て訓練と衝突とに依り其他の法ゝ依て得べきものより一層高尙なる品性の模型を造るを得べし、例へば捐身、自制、同情、憐憫等ゝ其存在の爲めに惡の蔭影を要するが如し、但し余は其辯護者は常に必ずしも之に就て或結果を考出せざりしと信ず。

*若し然らば天は如何、惡は德義を誘出する爲めに現されざる可らざるか、又若し最高なる品性の模範を以て惡との戰爭の結果なりとせば、Seraphim 及 Cherubim 等は惡を知らずんばある可らざるか、夫の神の寶座に於るも亦然り。斯く惡に對し徐々なれども確實なる勝利に依りて完全に進む所の創造は恐らく決して墮落せざりし如くに保護せられたる創造よりも一層高尙ならん、聖ベルナルドの言に曰く "ordinatissimum est minus interdum ordinate fieri aliquid."—*Ep.* xxvi., *ad. Eug.* iii. 余ゝ此等の說を可定せざるべく又否定せざるべし、然れども德義と道理とは一事を要す、即ち創造が實に斯く進みつゝあるべきと、惡に勝つとは實に勝利にして講和にあらざるべきと是なり、即ち此等は(蓋し滅亡は毫も勝利に非ずして生

命に打勝つ死なり)何等の形式に於るも偏愛說(パーシアリズム)を要せずして遍愛說(ユニヴァルサリズム)を要するなり。夫れ消滅の作用に於て又既に消滅せられたる神の企に於ての惡は寬容すべし、一層完全に制服せられ且是に依り人を訓練せん爲めに一時寬容せられたる惡は吾人の理會し得る所なり、然れども道德上若くは身躰上の惡が永久と爲りしとき、又一手段たるを止めて終局と爲りしとき、單に經過する汚點たるのみならず神自身の如く永續して萬物の眞組織に働きを及ぼすとき、神は甘んじて惡の進入を許し、自から之を知るも其創造物より於て永久の恐嚇たる運命を定めたり、と敎ふるときは、即ち吾人は神に對する眞實の尊敬と最高なる內部の聲(若し神何處にても人と語るとせば實に其聲なり)より迫られて之が承諾を拒まざるを得ず。

而してこの吾人をして甚だ有益なる疑問即ち永續せる頑固の罪の惡結果は一朝全く過去るべきや否やとの疑問に對し準備を爲さしむ、或場合に於ては之に答ふるを得べく、恐らく或場合に於ては決して答ふるを得ざるべし、余若し吾人の主の著しき詞を一時斯く適用し得るとせば或人は或意味に於て、停止且不具なる生活より入るべし、罪の頑固なる永存は心靈に創傷を遺し、其惡結果永存もべし、又假令へ罪の病は痊癒せらるゝとも永く羸弱とならん、余は之を決定せざるべし、此二結果は當に注意すべきものなり(一)そは「若し之を眞實とせば余は余の誘誘を保つべし、蓋し萬物終より正に歸すべけれバなり」と言ふべき不注意を誘ふ如く、一層大なる希望に被らもる外見よき罵詈に對し新鮮の答辭を吾人に供もべし。如何なる見解を以てするも余が答ふる汝の誘誘は汝に「未來の『忿怒』を來し、汝の罪の頑固に應して*恐るべき應報を來すべし。

口碑的信條の惡結果は誇大の威嚇を以て未來刑罰の眞意に對し人を畏縮せしむべし、無限刑罰に親昵せる人は實際上、恐るべきも、少き刑罰を甚だ輕視せり。されば此書の批評者に主張して曰く、吾人無限刑罰を保つに非されば宗教の哀しむべき原素を消失すべしと、然らば神より受る苦痛と追放の一万年(或は十万年)は笑ふべきものにして悲しむべきものに非ざるか。

然れども尙ほ汝の誹謗は嚴に永續せる刑罰は汝を連累すべし、汝は假令へ赦さるゝとも、汝の罪が殘したる麻痹と心靈的衰弱とに依り永く苦しむべし(二)此事は双方の合理的人物に會合所を供するを得ざるか、蓋し最終普及の復興は或意義に於て永久の刑罰に反對せざるなり、何となれば頑固の罪人は縱へ救はるとも尙ほ永久の損失を受け、即ち將來最高なる心靈的幸福を失ふ刑罰を受くべければなり。且各種の偏頗救濟は皆私慾よ基くものなり、此私慾は大に之を覺ゐさるも極めて其實あり、數多の人民ゝ所謂宗教界の成分中に普及主義の觀念を容るとも恐怖して肯んせざる者あるを視察せしならん、其無言の感覺は數々下の如し、若し地獄消失せは恐らく我天國も亦消失すべし」と、次に其演繹說を生ず、曰く「若し然らば余は如何に成り行くや」と、斯く吾人は或眞意に於て實に地獄の上に建設せられ無限の不幸と罪との上に支持せられたる天國を有し、而して之を耶蘇基督の眞實なる福音として受容せり、壞敗する私慾は人意に適し且神聖と爲され、宗教は汚され、救は生活に對し恐慌の一種と爲り、爲し得へき普及の救は惡の力に依り常に終端を捉へらるゝ所の獵と爲る、而して就中最も奇異とすへきは此奇怪にして哀しむべき光景を以て耶蘇基督の勝利と斷定するに在り、余は凡て是れ一層多く怪しむべきか將た一層多く驚くべきかを知らず、蓋し幸福者にして不幸者の憂悶と誹謗との上に文字通りに建設せ

られたる天國に於て一瞬間たりとも幸福となり、又孤獨の哀哭者が絶望落胆に永く坐する間われ獨り幸福を受けんとする者あらんか、豈に之より驚くべきものあらんや、天は耶蘇基督に對し同形なり、而して耶蘇基督に對する同形は失迷者に對し不朽の同情を有せり、其最も惡しき敵に對し不滅の愛を有せり、然れとも口碑的信條(及其各種の變體)が吾人に供する所の天は、只之を思ふのみにても慄然として寒心せしめ殘虐恐るへきものなり、冷却せる同情、麻痹せる愛、私慾の治療、永く枯凋せる憐憫、斯の如きは我イエスラエルの教師の多數が教へし所の天なり、彼等曰くそは神秘なりと、余答て曰くそは天の如く假裝せる地獄なりと、然らは最も重大なる道德上の問題に關係する所のものを斯く答ふるゝ則ち一も答を爲し能はざるとの告白なり、彼等は之を知るに足るべき才智吾人になしと想像するか。

憤怒せる法敎師長曰く「汝ゝ神を惡し樣に說んとするか」「惡を善と呼び善を惡と稱する者には災あり」と、玆に口碑的信條の特有の悽凉あり、そは吾人に吾人の敵を愛せべしと告げながら、彼自身の敵を無限の滅亡に交附せり、彼は永久の憎惡を以て罪を憎み、之ゝ無限の時期、永久の住處を給せり、蓋しそは斯く甚だ惡し故に永續せざる可らずと、是れ甚だ惡しき罪人ゝ對し死後望なしと云ふの意義なり、彼等の死は斯く大なり、故に永續せざる可らず、そは斯く甚だ不潔なり、故ゝ神の贖ひ給へる宇宙を永く汚さゝる可らず、幸福を得たる者は地獄の淵を隔て靜に望見して滿足し、其滿足消滅せず、又失はれし者の苦痛(八十三及四頁)の爲めゝ影響を受けずんば其歡喜を減するとなし、而して終に無限の罪に依り暗晦となりたる宇宙に帳幕の落るとき、彼等は實に之を十字架の

勝利と呼びて、愛い麻痺して基督の精神は枯死せる所の言ふべからざる私慾の天國よ退隱もるを滿足し、失はれたる者の永く啼泣するを顧みず、夫は永く妻の訴願に耳を傾るとなく、母は其子の永久の苦痛に注意せざる乎。

ダンテ中古の地獄の門に題して曰く「此に入る者は望を棄てよ」と、吾人の敎師等は吾人をして恐らく一層恐るべき詞を天國の門に題せしむ曰く「愛と同情とを棄てよ、此に入る者は耶蘇基督の精神を棄てよ」と、彼等は吾人をして左の如く歌はしむ、

"O saints of God, for ever blest,　　オー、永く神の惠を受けたる聖人よ、
In that dear home how sweet your rest."　その親愛なる家に於て汝の休息奚ぞ快きや、

嗚呼妻よ、汝の夫が永く火に燒かるゝも汝の休息は奚ぞ快きや、嗚呼母よ、汝の兒童が永く苦しむに當り汝の休息は奚ぞ快きや、その親愛なる家に於て汝の休息奚ぞ快きや、

「汝は受福者が地獄の苦痛を見て觀ぶを讀み驚愕したり」(八十三及四頁)然れども汝の主義に於ては驚愕すべき理由、否其蔭影もら之あらんや、汝は汝の敎義の避く可らざる結果に遭遇するを恐るゝか、受福者は神の審判の如何に論なく之に服從し且之を樂しむか、願くは之を熟考せよ、此等の審判は、吾人が考ふる如く治癒的にして有限なるにせよ、又は汝の考ふる如く復讐的にして無限なるにせよ、實に神意の結果なり。此等は汝の訴願を正當なるか如く要求せり、聖書は汝に語て曰く「義者はかれらが讐かへさるゝを見て歡ぶべし」――(詩五十八〇九)若し汝の獨斷眞正ならば汝は怖るべき章句(八十三及四頁)が實に辨解する所の結論を逃るゝを得んや。

之を要するに此等の恐怖は現今の如く不可思議論が斯く威嚇しつゝ

あるとき、又科學が痛く假裝せる輕蔑を以て福音を視るときに敎へらるゝなり、而して無知(好き意味を以てすれば)なる僧侶い屢々「信仰を持て」と叫んで滿足せり。是れ恰も神は道理の創造者にわらざりし如く、良心に對する忠義は凡て合理的生存物の最高の義務にわらざりし如く、又其最上權の承認は何等の宗務も唯是に由り爲し得べき眞の狀態なりしが如し、余は我道理に超絶する祕密を承認すべき信仰の命令に滿足せり、然れども良心を汚し德義心を貶すは神に叛くものなり、it is propter vitam vivendi perdere causam." 余は頑固の不眞理を言ふにわらざれども、有力なる虛妄が殆んど我宗敎的文學の全体を汚すを言ふなり。

余を以て見るに、凡て英國の神學者には何事も眞實又は虛妄なるか爲めを信じ又は之を信ぜざるの缺點あるが如し、そは彼等に超る如く見えざる問題なり」——*Life of* ARNOLD.——*Letter* 152.

虛妄は他事の意味を有しながら一事を言ふものなり、是に由り實よ世界の半分は墮落せらるべしとの義を表しながら世界の救はるゝことを斷定し、實に多數(又は少數にせよ、何れに係はらず)は永く惡魔に行くとの義を表しなから人類の救はるゝことを斷定せり、許多の儀式、讃美歌、說敎、論說等に於て之を爲せは虛妄なり、而して余は重ねて言はん、我宗敎的文學は此の如き不眞理を以て縱横に蜂巢の如く小孔を穿たれたりと。

虛妄を眞實と換置し、又其所有者が其眞實の半分のみを確知し、或は全部を確知せざるに、之を一の眞實の如く裝はんと焦慮するい恐るべき事なり、蓋し虛妄は眞實より毫も利益を得ざれども、眞實は虛妄に依り萬事を破るべし、彼等は神の愛と其慈悲と其憐憫と其正道と其公義とを說き、常に之を語るも、彼等自身の靈魂に於る此恐るべき伴侶は凡て

此等のものを笑ひつゝあり、神の愛を以て永遠の苦難を與ふるは何ぞや、神の公義を以て永遠の害惡を與ふるは何ぞや、吉報、救、噫之を以て萬事を成せり」——STOPFORD BROOKE然れども世俗の信條と聖書と混同せらるゝ間は此不眞實の系統繼續せざるを得ず、吾人は「我儕の父」に祈り、次ぎに彼自身の子に對し、最惡なる此世の父の行爲よりも一層殘忍なる行爲を我儕の父に歸し、此くして、神性を人性の水平線の遙か下方に貶せり、若し眞實を虛僞なりとし、愛の本質を自から殘忍なりとし、神を以て余が記するを敢てせざる所の者なりとせば、則ち崇拜の爲め吾人に殘る所のもの何ぞや、獨り之に止まらず世俗的信條に無限なる殘惡の行爲を神に歸しながら、決して衰へざる神の慈悲と、決して失はざる神の愛とを吾人に信認せしめんとせり、是れ抑も虛妄なり、殘忍の嘲弄なり。蓋し、此缺るとなき永久の愛は凡て永遠の無情無覺と、不朽の惡と、其自身の子等の無限の苦痛とを看守せり」と實に謂ふ者より來るを以てなり。二種の相違ある尺度を用ふる商人に不正の者なり、神學者に於るも亦同一の理なり、彼果して不正にあらざるか、五分間たりとも猶若くは犬を苦しむるは殘酷なるも、妻子の無限の不幸に就き無情なるは全く正善なりや、烟筒掃除の暫時の害も最も誠實なる憐みを惹起さしむ、然るに失はれし人類靈魂の永遠の苦惱は受福者に一片の憐をも喚起さゞるか、若し罪人を人爲法に依り一時間苦悶せしめば凡ての文明世界は擾亂を起すべし、然れども同一の罪人をして限なく苦難を受けしむるに、此無限の苦痛は能く一瞬時も天國住民の歡喜を攪亂せざるか、活体解剖は此世に於て嫌ふべしと雖も地獄に於て最も正しと、然らば暫時なるときは忌むべくして無限なるときは最も正しとするか、例へば羔と聖天使との前に於て其自身の子に永く活体解剖を施し、又は少く

も其解剖せらるゝを許すは、永遠の愛に對し最も正しき事なりや。——（默十四〇十）（此章の眞意を知らんとせば五百六十及六十一頁を看よ）

吾人の尊敬する慈善家は漂泊者の暫時たりとも苦悶するを目視するに忍びざるべし、然るに將來漂泊者の無限の苦痛に依りて感動せられず天國の歡喜を受るの準備を爲すべしと云ふは、吾人の心に之を驚愕と稱するも尙ほ足らずとの思想を滿さしむ。

口碑的信條に供せられたる辨解は眞に之に相當せり、斯く多數の者ゝ「神ゝ各人に對し其最善を爲すべし」てふ句の下ゑ自ら隱遁せり、斯る辨解は議論として言ふにあらざれども不適當なる愉快の一片として謂ふものなりと余は唯想像するのみ、承認せられたる事實ゝ何の爲めゾ、全能の神は何等の假說に據るも、創造するもせざるも全く自由なり、而して其自身の薄命なる子等の生活が實に無限の不幸憂愁に陷るを知りながら、其多數の者に生存の不幸なる賜を强ひて與へんとする者なり。神は其子に對し最惡を爲すとも此行爲を神の最善なりと稱するは抑も言語の濫用にあらずや。

或は「失はれし者若し天國に置かるれば幸福なるならん」と言ひて實に無限の惡を辯護せんと試る者あり、是れ恰も一層大なる希望が初めに失はれし者の改化を明白に敎へさりしが如し。

尙ほ無限の惡に對する別箇の辨解あり、余はフォスター氏の言を假りて之を說き且之に答へん、「通例引用せらるゝ所に據るに、犯罪は限なく連續し、恐らく限なく增殖をべし、故に刑罰は無限ならざる可らずと。こは刑罰と之を課するの原由との不權衡を許容するが如きものにあらずや、然れども斯くあるべき場合即ち刑罰は單に此世の暫時の生存の罪に對する應報に非ず永久の狀態に於て連續せる（常に增殖せる）罪の連續せる刑罰なり、と云ふ事を想像せよ。彼の引證は敎理の辯護に毫も益なし。蓋し始めて恐るべき狀態

に交付するには罪の連續を要す、教理の教ふる所に據れば、有罪の精神は永遠變化なく維持すべき處刑を爲すは元來交付の本質にして恐るべき過重なり。罪と苦とに處し、又其論に據り、苦しむ爲めに罪に處するとは、死すべき狀態に爲されたる罪の刑罰として課せらるゝなり、故に永遠の刑罰は實に現時の罪の刑罰なり」——*Life and Corresp. vol. i.* 若し實に不信心に於る宣告が永く罪に對し有力の必要を含むとせば、茲に供せられたる辨解は日碑的信條に就て爲し得べき最深の罪狀なり、尙ほ又經句を引用する者に依り、未來の刑罰は既に過きたる罪に課せらるべしと說く所の太廿五の如きものを推薦せらるゝときは、此辯解に二重の意義ありとす。

此全体の問題ゑ於て其是非とも歸着すべき正統の結論——斷じて彼等に矛盾せる夫の獨斷の排斥——に於て、躊躇す可らざる確信に從いずと云ふ者あらば豈に之より驚くべきものあらんや。余は此等の確信は誤りなき嚮導たりと斷言せず、實に何を以て其指示する所が誤なき形狀にて吾人に達すると言ふを得んや、そは聖書其物に就て言ふを得べきか、之を翻譯し又は之を註解せる者は誤なきか、之を讀む者は誤謬なく偏見なきか、然れども一人の基督教徒も爲めに其神權を疑ひ又は之に於て實際上充分結束する嚮導を見失ふとなし、其他神が人類に對する原始の默示の場合に於ても亦然り、吾人は之に對し無誤謬を求めずと雖も吾人の德義心の熟考せる審判が、日常の生活に於て吾人を嚮導し又吾人をして全く働かしむる神の詞を吾人に現さんことを求むるなり。

德義心は神の吾人に對する默示なり、又如何なる書籍中よりも來る如く全く眞實に吾人に語る所の神の詞なり、と云ふ事は吾人の反對者の記臆せざる所ならん。「汝は神の現示せる意志に對し汝の觀念に從はざる可らず」と、恰も吾人の眞正なる道義的感覺が神の吾人に現示せる意

志ならざりし如く、說くものは純粹の詭辨なり。

吾人をして、吾人は吾人の觀念に從はざる可らずと言ふとの虛妄なる所以を考へしめよ、吾人は從はざる可らざるか、何に、吾人の眞理の觀念に從ふべきか、神は吾人が虛妄と稱する所のものを語るべきか、若し然らばうは眞實と爲るべきか、然れども余若し神に適用するとき余の眞理に於る觀念に從ふ可らずとせば、何故ゝ余は余の慈惠、正義、愛ゝ於る觀念に從ふべきか、神は正義を愛すべしと宣言しながら實際ゝ於て恐らく之を憎むべきか、此問題い最も必要なり、殘刻の辨解を用ふるは惡しく恐るべし、汝が正しく何事ゝも之を用ひざる(正ゝ汝が敢てせざる故に)に當りて之を用ふるは遙に惡し、若し吾人々類の正邪に於る觀念が神に適用せらるゝとき果して信任す可らずとせは、何事起り、何事正しく、何事惡しく、何事眞にして、何事虛なるべきか、都て錯雜、混沌、擾亂して地獄と天國と其位地を換ふべし。されば吾人は殆んど何物に就ても善惡を知るとなし、——(二十及廿一頁、廿八及卅一頁を看よ)吾人は實に不可思議論者なり、是れ吾人は何事をも實に知らざればなり、吾人は自から欲する稱號を唱ふべし、然れども吾人は(道德上の)不可思議論者にして且つ吾人は斯く存するなり。

此篇は無限刑罰の敎理に直接間接に相應せる道德上の零落を强く主張したり、余い今茲に意外の方面に於る最後の場合を說んそは大に不德の決疑論の增長を助るものにして、終に人類の良心は公然之に反對すべし、蓋し其系統たる死罪と輕罪との區別に起源するを以て然るなり、今若し到底悔改せずんバ罪の結果は斯く言ふ可らざる程恐るべしと想像せられしとき、直接の刺激は成るべく此等の罪の區域を狹くせんとせり、而して斯く誤用せる方案い至大なる道德上の區別を破壞し、

重大の罪を只輕少の罪と定むる爲めゝ、法式上之を薄くするの用を爲せり、――MAINE, *Antient Law*, p. 352. 余は又古代に於て最も廣大なる宇宙神教(ユニヴォルサリズム)說の弘布せるとを許多の證據ゝ由りて示したり、是れ人の多く知らざる所且知らすして否定せし所なり、余は復た此宇宙神教(ユニヴォルサリズム)說が實に經典に基さし事と後年に於て最も神聖なる人々より反響されし事とを示すべし、汝は英國宗教の歷代史に於て宇宙神教徒(ユニヴォルサリスト)たる、ダブリユー、ロー氏よりも神聖なる氏名を求めんとするは到底無益なり、或は宇宙神教(ユニヴォルサリズム)の「放縱」なるを說く者あれども、ロー氏の赫々たる熱信、神聖なるマクリナ、(其死期は古代史中最も感動を與ふべき者なり、三百四十二頁)オリヂン(其生涯は一の連續せる祈禱なり)古代教會の同主義なる許多の人々に之を推薦したるは則ち此「放縱」なりしか。熱心なるリンラセンのエルスキンは此「放縱」に依りて宇宙神教(ユニヴォルサリズム)に歸依せられしか。又チヤーレス、ジオージ、ゴルドンは如何、プロレンス、ナイチンゲールは如何、神聖なるケンは此「放縱」に依りて彼の日に行はれしものよりも一層廣き希望に心を寄せしか、又此等の人々は多數の古代賢哲の如く、凡ての父にして、終りまで愛し、失はれし者を見出すまで尋ぬる所の神の精神を得ると更に眞實ならざりしか。

次に吾人は宇宙神教(ユニヴォルサリズム)と創造、降生、贖罪、復活との關係の密接せる所以を見たり、(第六章)又注意して撰民、死、審判、火の意義を講究したり、聖書及古人の眞教義が此等の點に於て一層大なる希望と全く相符合し、普及救濟說を一層明瞭なる救に致すべき事を示さんと試みたり。幼時に教へられたる教理を以て飽和し且數多の束縛に依りて神聖と爲されし心意に新鮮の觀念殊に宗教上に關するものを導んと企つるは、既に濫書せる紙上に更に字を書せんと試みるに等し、是以現今流行する數多の

調和、辨解、變形は其成分に於て口碑的信條の虚妄なるを半は確證するものなり、而して數多の者は之に與へられたる最初の庇保所を收領し、斯くして狀態的不滅說を執り、其耶蘇基督(十七頁)の勝利を敎ふる大始點を充たすに足るや否を(問はずして書に筆するさへ)究問するを止めざるなり。余は此書に於て最も忌憚なく語らざるを得ざるときも、我反對者の完全なる信實を認めんとを常に求めたり。我爭論は、最も熱心なるときも、一箇体を以てするに非ず、一系統を以てするなり、玆に余は最後の控訴を爲して、一層高き水平線に登り、凡ての父と其愛に伴ふ正義とに相應する唯一の見解を一層大なる希望に於て知らんと試みざるゝと讀者に問はん、唯此希望こそ吾人が神に像りて造られし妙工を能く說明すべし、唯此希望こそ能く愛の威勢と其墮落者を引擧ぐべき不滅の渴望を滿足し、就中最も望なく最も悔ひざる者を終に救ふへし、唯此の希望こそ神に依り「万物成し得べし」てふ事を實に敎ふべし、唯此希望こそ凡ての悲を和げ凡ての涙を拭ふべし、唯其光に依りて吾人の罪の深淵を眺め其最惡なる不和ゝ於て希望の最低音を聽くを得べし、唯此希望こそ吾人をして永遠の善と其最後の勝利とを眞に信せしむるのみ、唯是に依りてのみ吾人は充分適當なる神の唯一の觀念(四百廿八、四百九十六頁)――一意、一愛、一法、一主及「全受造物の依て以て動く所の遼遠なる一の神の關係」を得るなり。

吾人の聖書の敎義に就き凡て重要なる問題を熟考したり、吾人は舊約書に於ても凡ての人類を包含する未來幸福の當初よりの暗示を見たり、此等は神の企の一層充分ゝ現はさるゝとき益々明白となるべし、而して神の知識が地を蓋ふと猶ほ水の海を掩ふが如くならんとき、作詩家も預言者も其未來の約束に於て相一致すべし。

又吾人は聖書の傾向(百卅二頁五百十頁)と其教義を貫く所の大原理(百卅二、百四十五、四百七十八及九頁)より來る一層大なる希望に對する議論を忘れざるなり、余は又口碑的信條が其威嚇に於て經典の言語と用法とを全く誤解せる所以を示さんと試みたり、(五百三十六及四十頁)是れ注意して研究すべき題目なり。

新約書には其最高なる切要に應する注意を加へたり、世俗的信條を敎ふる如き章句は注意して之を熟考したり、又吾人は此等の章句は皆努めて未來の罰に就き罪人を戒るも、何處にも無限の刑罰を敎へざる事を斷定すべき理由を示したり。

終に新約書が屢々萬民の最後の救濟を說明し敎示し又は其意を含む章句に充ちたる所以を指し示す、爲めに一章を供したり、此證明は甚だ重要なるを以て尙は此處に之を約言せん、吾人は全く限界なき王國を基督に歸せし所以と萬民が彼の與ふる救を見るの如何を見たり、又善良の牧者は其失ひたる羊を悉く發見するまで尋ね求むべし、又人の子い失はれし者の二三を求むるにあらずして單に失はれし者を求めて救ふ爲めに來れり、或は之を「滅されし者」と譯するものあれども「滅亡」は最後の滅亡の意を含まず、是れ汝の既に讀し所ならん、彼の天職は世界の救濟を其目的となせりと正に記載せられたり、又彼は全世界の罪を取去るべしと言はれたり、此等の語は果して一部の救濟を示すものなるか、正直に之と符合するか、又萬物は神子に與へられたり、斯く與へられたる萬物は彼に來るべしと言はれたり、彼は數々世界の救主と記されたり、然るに俗說に於ては世の光として彼は實に之を救はざるなり、彼は世界に生活を捧ぐと言はずして與ふと言はれたり、是れ全く異なりたる事なり、彼い其十字架を說くに當り萬民を己に引くべしと言へ

り、(之よりも純全なる語あらんや)彼附加して曰く、彼の來りしは審判の爲めにあらず世界を救はん爲めなりと。人間の言語の意義に就き如何よ公平なる理論を用ふるとも、凡て之を無限害惡の恐怖と調和するを得んや、若し全世界の罪が取去らるゝとせば、焉んぞ其無限刑罰に用ふる地獄あるべけんや、若し萬物殘りなく(原意は成るへく最廣なる意なり)基督に與へられ、又斯く彼に與へられたる万物悉く彼に來るとせば、焉んぞ之を無終の苦難と調和するを得んや、然れども更に進んで使徒の使用せる言語が全く茲に引用するものゝ如き世俗的信條に反する決斷語たるを示さん、例へば約翰傳に於て神の子が惡魔の工を破壞する爲めに現はされしことを讀むに當り、ろは何を以て此等の工を永く地獄に保存する事と矛盾せざるか、吾人之を問はざるを得ず。基督が「彼は幾世にも生存し地獄と死との鍵を有す」と吾人に語りし中には毫も意味なきか、又万物を新生し呪詛も苦もなからしめんとの約束は何ぞや、若し之を万物復興の約束にあらずとせは抑も何ぞや、終に天に在り、地に在り、又地の下に在る(死物)もの悉く神に對し讃美すべしてふ默示錄の示現を思考せよ、普及救濟より狹少なる說を以て奚ぞ此等の語の明白なる意義を滿足せしむるを得んや。

斯の如き語を(眞に)避るは充分惡し、然し斯くなしたれば迚宇宙神教徒(ユニヴォルドヂリスト)を責めて經典に訴ふるを恐るゝ者なりと云ふは實に正當ならず、次に聖ポール、聖ペテロの書翰、及希伯來人に與へたる書翰より一層大なる希望を敎ふる新鮮なる章句の一大塊を擧ん、聖ポールは基督の王國が凡ての惡を制服するの確實なることを明に前見せしや殊に充分なり、さればアブラハムは世界を受取るべし、而して彼の部分として撰民の少數救はるゝにあらず、凡ての者救はるべし。人に害を爲したる如何なる

罪も基督の恩惠に依り賠償せられて餘剩あり、然れども若し一の*靈魂無限の惡に殘さるゝならば果して罪が爲したる凡ての物を實に廢するを得べきか、聖ポールは斯の場合に於て虛僞を語りしにあらざるか、實に一の公平なる答は此問に適せり、(但し公平なる答は宇宙神教(ユニヴォルサリズム)に導くが如し)尙ほ使徒言へらく全体の萬物は神の榮光ある自由に交付さるべしと、又凡ての イスラエル人は救はるべし、(彼等は「初果」なれは其救は全世界の救を含む四百三十四及五頁、四百八十三頁)又使徒は神の賜と召とは「易るとなし」(挽回すへからず)と斷定せり——是れ甚だ有味の言なり、蓋し世俗的信條は神の賜の終に無効になさるべきことを斷定するゝ非ずして何ぞや——而して聖ポールが斷定せし所のものは希伯來人に與へたる書に於て反響せられ、神の旨の不易を吾人ゝ確證せり、又聖ポール言へらく、神若し萬民を不信に閉鎖せしならば是れ萬民の上に慈悲を與へしなりと、此後句の「萬民」は「或者」の意にして前句に於ては然らざるか。

*若し只一靈魂が惡冥、死又は地獄の檻内に永遠無限に殘さるとせば、則ち惡冥、死及地獄は神に對して誇るべきものありしならん、而して斯る死は勝利に全く呑まれざるべく、常に其刺の或物を保つべし、又地獄は「ハー陰府よ、汝の勝利何處にありや」と言ふ者を更に嘲笑し得るならん。——無窮の福音——*Paul Siegvolch*, 1753.

彼は重ねて吾人に確證して曰く、若し第一のアダムが一般に死を來せしとせば最後のアダムは一般の生活を來すべし、又罪もし充つるときは惠は更に多く充つべしと。然るに汝は最後のアダムは實に許多の場合に於て墮落より起る惡を廢するを得ざりしと言ひつゝ此等の詞に無味なる矛盾を與へつゝあり、次に吾人は基督の帝國ゝ就き下の如く

告けらる、曰く凡ての膝は彼に屈し即ち、凡ての受造物、萬物は何物にても何處にあるも」――(LIGHTFOOT on *Phil.* ii.10.) 凡ての舌い稱揚――(原語は感謝の義よして又我主が其父に感謝を述るとき用ひし語なり)――すべし(太十一〇二十五)又一日――終りに於て――神は萬物の上に主たるへしと。基督に萬物を合約し、基督に依り萬物を彼れよ調和するは天父の好む所なり。吾人は實に何物も絶望の害惡に交付せられて以て神に調和せらるべしと信せんとするか、若し無數の子孫が其配分を惡魔よ送りし後、或一代及之に續く時代は充分救はるべしとせば、萬物神に調和せらるゝと言ふは則ち(若し之を知らざるにせよ)眞に遁辭なり。又使徒は下の如く吾人に確證せり、活る神は凡ての救主なり、耶蘇基督は死を廢したり、神の惠は萬人よ救を致すと此所說は一部的*救濟と明に矛盾せざるか、又我反對論者が羅十一〇三十六(四百八十二頁等)の如き章句に依りて告知せられたる高尚にして最も感動すべき希望に決して論及せざるは何ぞや。

*又何を以て此使徒は恰も基督の制服すべき未來の王國の超然たる榮光の示現と、何物を問はず何處を論ぜず凡ての受造物を包含する無限無極なる示現とを目擊せし如く時々熱心に見にしが、之を空しく看過するは苟も思慮ある讀者の爲し能はざる所なり。

聖ペテロの說く所も亦同一の結果なり、彼は基督が不從順にして其僅に死せし所の死者に福音を宣傳へしとを說き――此話の意義は恐らく最も宏大にして基督が被衣の裏面に於て罪に死せし者すら慈し救はんとすることを示すものなり――又主は何人の死するをも好まざるなりと附言せり、神の愼重なる旨(原語い斯の如し)は何物にも來らざるか、次に希伯來書に於て吾人は或著しき證據を有す、例へば萬物基督の

下に置かるべし、彼の死に於る目的は惡魔を滅すに在りし、一たび世の終りに於て彼は其自身の犧牲に依り罪を取去り即ち廢する爲めに現はれたりとの斷定あり。罪の廢止は永く地獄に惡を保つと果して矛盾せざるか何人か能く之を說明すべきや、斯く口碑的信條は全く聖書の敎義に反對するが如し、是れ殆んど神自身を否定するよ非ずや、蓋し吾人若し全く神を信せは神の失敗を容るゝ能はざればなり。故に神は實に万人を救ふべきか、若し然らば必ず之を成就すべし、又神は之を欲せざるか若し然らばその如くなさん、第一說は一層大なる希望を含み、第二說は單に*カルヴィニスムたるのみ、余は之を合理說と認むるを得す。

*されば*カルヴィニズムが一般に信用せられざるに至りし以來確乎として一層大なる希望に向ふ運動四方に起れり。

以上は新約書の敎義を略言せしに過ぎず、是れ余は普及救濟の約束を悉く引用せしに非ざればなり、此略說は口碑的信條の塲合に於る如く、原文の誤譯又は誤解に基く獨斷を以て東洋的比喩を建立するものに非ず、明瞭よして反復說明せられたる證據なり。實に吾人は每行に、每契約に、諸多の斷定を反復疊重したり、即ち凡て其說く所同じからざるも密に相連環して、其中心たる思想と、耶蘇基督の勝利の完全と、其万民を救ふ王國の無限なる性質と、其降生、死、及復活に依り凡て惡の權力を制服する勝利の確實なることを指示せり、「天父は基督に依り再び万物を己れと調和し(中略)斯くして何物たるを論せず何處を問はず万物を復興せんと欲せり」——LIGHTFOOT on *Col.* i. 19,20. 斯の如きを以て余は次に問はん、口碑的信條を維持する者は吾人々類の無慮數千万の(或は基督を死に致さしめし所の何等の靈魂に就ても)最後の滅亡を斷定するに

由り、基督の都ての事業、降生及苦難に對し知らず識らず恐るべき光景を與ふることを靜思熟考せしとありやと。吾人は知る彼れ世界を救ふ爲めに來れり、汝は彼を眞神の眞神なりと言ふも凡ての書籍と凡ての說教に於て實に彼の失敗を宣言せり、彼の使徒等は强く明なる言語(今尙は活動する言語)を以て彼が死に打勝つことを告げ、汝は死が彼に打勝つことを告ぐ、蓋し夫の愁嘆する數百萬人を永遠の地獄に充さすは則ち彼の失敗なり否彼の最も甚たしき失敗ならずや、豈に之よりも一層甚だしく彼の贖罪を輕視するものあらんや、余は聖書に於て讀めり凡てのものは彼の死に於て(實に)死せりと、(彼と凡ての人類との結合は斯く至緊至要なり)然らば耶蘇と共に死せし所の(改正譯哥後五〇十四)失はれし者——恰も彼の最も貴き血に尙は濕され尙は彼の愛に依り求められたる(愛は不朽なればなり)彼の創造せる靈魂——は無限の苦難と悲哀とに陷るべきか。此等の靈魂は永く罪と苦とに存在すべきか。我主の苦難い此等の無限、無効、無望の爲めになされしか、余は之を耶蘇基督の勝利と謂ふべきか、之を大なる歡喜の吉報と謂ふべきか、余は我反對者の正直なるを疑はずして充分之を認むるなり、然れども基督は一の不死の靈(彼いろの爲めに死せり)をも永遠に看護しながら、其靈魂の苦難を見て——其愛する一子が無限の苦難に陷り又は滅亡せらるゝを見て——滿足せりと敎ふる者あらば豈に奇怪なりと謂はざる可けんや。

乞ふ余をして更に進んで言ふ所あらしめよ、蓋し余は世俗的信條が聖書に被らしたる不名譽に再び反對せんと欲すればなり、願くは余をして左の如く問はしめよ、新約書に於て基督に一般の帝國を交付する契約を數々復言せる意味は世俗の見解に據れば如何と。萬物(弗一〇十)——

原語は最も廣大なるものを指す――基督に合約せらるべきは天父の欲する所なりとい果して眞か、基督ハ實に死を廢したり且彼は惡魔の工を悉く破壞せん爲めに現はされたりとは果して眞か、又彼か神は彼に萬物を與へたり、天父の彼に與へし萬物は彼よ來るべしと言ひしは只使徒の妄想に過ぎざるか、然れども若し凡て此事が現に聖書に記載せらるゝを見れば、何を以て罪と地獄の無限なる事を眞に敎ふべきか、罪は無窮なるも世界の罪は神の羔(耶蘇)に依り眞よ取去らるべきか、地獄は失はれし者を永く貪り食ふと雖も万物は神の子の榮光ある自由に交付さるべきか、余は重ねて言はん、此等の問題に適應すべき者は公明なる答辨にして、縱へ正直に言ふとも其實遁辭たるの答辨に非ず。實に世俗的信條が久しき慣習に依り其維持者を痲痹せしめたる聖書の矛盾――(其前後矛盾を看よ)――を敎へつゝあるを回想せよ、基督は「地獄の鍵を持ちたれども決して之を開かず、基督は「萬物を新生す」と言ふと雖も無數の物と人とは新生せられず、善牧者は「見出すまで尋ね求む」と言ふと雖も彼を最も要する者を決して見出さず、「最早苦なし」と言ふも限なく苦あり、「最早呪詛なし」と言ふも地獄ハ失はれし者の呪詛を永く反響せり、「涙は凡ての眼より拭はる」と言ふと雖も失はれし者は永く啼泣せり、「天に在り地に在り地の下に在る凡ての物、海よ在る者其中に在る凡ての者は神に對し惡と榮と譽とを唱ふべしと言ふと雖も數多の受造物は永遠窮りなく不幸よ閉鎖せられ、「凡ての者基督に於て活さる」と言ふと雖も數多の者は望なく限なき死に沈淪せり。

余は古代よ於て數多の人が敎へし如く(充分確證ある事實)一層大なる希望を承認せん爲めに辯論するなり、此希望は嘗て「吾人の父」が凡て彼の人間の子を救ふべき目的たりしものなり、此より狹小ならんとを信

し將た之を望むは、余が既に示したる如く、經典に違背するのみならず其全き趣意と目的とを誤るものなり。蓋し聖書は零落よりも一層廣く深く大なる復興を說くものにしてアダムの各子に救を致すものなり。聖書い世俗的信條の敎ふる如く一の全能者が彼をして死せしめたる者を救ふと云ふも其實之を救はざる所の自家撞着を說くものにわらず、「見出すまで」尋ね求むる無限の愛、天地滅ふるも決して朽ざる愛、其眞性より消滅すべからざる愛――神父の愛――を說くものなり、不變なる主、神、全能者の不變の目的を說くものなり。

尙ほ此一層大なる希望に依り、又只此のみよ依るも、吾人い聖書の各行各字、其罪人に對する嚴重の威嚇、凡ての者に對し生命の約束を反復することを承認し調和し得るなり、余は此等の威嚇を默認せべし、吾人が既に知る如く若し神の審判及刑罰の眞意を確知し、又彼の詞に依り未來の「時代」に於て彼の目的の必ず成遂げらるべきを知るに至れば、此等の威嚇は普及救濟の約束と充分よ調和せらるべし。然り、數多の時代は此短き生活に繼て來るべく、又增加する目的は此諸時代を貫通すと余は信ずるなり、蓋し新約書斯く敎へ、又凡ての道理之を確定すればなり。神の威嚇が不信心者に對し其完全なる成功を得るは此時代の中、又は其進步の間に在り、而して救濟の演劇の連綿たる數多の脚色は徐々として開示せられ、完結よ達すべし、蓋し一たび萬民を救ふべしと宣言せる神の目的は其眞性に依り永く確立せざる可らず、彼の眞刑罰を課する所以又他日凡ての受造物の耶蘇基督に合せらるへき所以は此目的の爲めなり。此を以て吾人一層大なる希望を持する者い罪人が未來の數時代の中よ神の烈しき審判を待ち望むと、又時代の規律が人間の意志の「我儕の父」の意志に從ふまで、又夫の人口に膾炙せる沈默なる預言

に於る如く「天に在る如く地にも成るべき」ときまで延長せらるゝことを充分信ずるを得るなり。

此を以て余は救世主か斷乎として十字架を眺めて、「余若し擧られなば萬人を引て余に就すべし」と言ひしとき其心に充滿したる者の如き宏大なる希望を辨解する者なり、余は凡て神の聖預言者が爲したる明白なる契約「万物の復舊あらん」との單純眞實なるを辨護する者なり、(徒三〇廿一)此結果當に左の如くなるべし、即ち此契約は其公平自然の意味に於て眞實なりや、將た不眞實なりやと。此間に對し然りと言ふか否と言ふか二者其一を出づ可らず、余を以て之を看るに、余は此契約を信じ、基督の教會は全人類を包含すべしとの唯一眞正なる寛大を信じ、彼の救濟の力は如何なる意志も抵抗し得ざる者にして、万物は他日完全なる歸順、愛及調和を以て之に服從せざる可らずと信ず。余は耶蘇基督の勝利は最後に完全ならざる可らず、即ち何物も彼が全人類を救ふべき十字架及苦難の力を損害するを得ずと云ふ中心の眞理を福音の大希望として承認せんことを辯護すべし。余は彼が其靈魂の苦勞を見て而して滿足せらるべきを信ず。而して世界を悉く救ひ万物を悉く回復するに非ずんば耶蘇基督の心又は吾人の父の愛を滿足せしむるを得ずと余は確信するなり。力と善とに於て全く自由絶對なる天父が、實に自身の子輩が無限の罪と零落とに陷るの確實なるを知りながら、之を創造せしと云ふ事は德義に反し信じ難きを以て、余は之を排斥せんことを凡ての公平合理なる人に望まんとす。故に余は此等の紙上に於て一層大なる希望を辯護したり、故に余は凡て人間の思想力の充分確知すべき限界を越へて「樂園は恢復せられ」凡て罪の汚は宇宙より除去せられ、凡ての心は幸福に滿ち「神は万物の上に主たるべし」との榮光ある示現を

信ずるなり。アーメン

六百四十二

宇宙神教確論 大尾

附錄

○トーマス、アリン氏が宇宙神教に改宗せし理由

米國ニユー、ジオルジー州モーリスタウン府のドクトル、ヘンリー、エヌ、ドッヂ氏は「宇宙神教確論（ユニヴオルサリズムアセルテッド）」の著者なる英倫教會（イングランド）の宣教師トーマス、アリン氏と書信を往復せし後、アリン氏が宇宙神教を採用し之を研究するに至りたる所以と、英倫及蘇格蘭に於る此問題の景況とを報告すべき旨を通知せり、蓋しドッヂ氏は斯の如き報告は多數の宇宙神教徒の喜んで聞んと欲する所にして米國に於る宗派と他國とに在り他教會に屬し孤立して宇宙神教を主張する者との間に益々同情を增し交誼を厚ふするに與て力あるべしと思考したればなり、近頃アリン氏よりドッヂ氏に贈りたる一書に曰く、余は此宇宙神教の大問題を以て福音の心髓本質と爲すものにして自から謹んで爲し得る限り之を敎ふるは余

の義務なり余の喜ぶ所なり」と。

上に述べたるアリン氏よりドッヂ氏よ贈りたる報告は左の如し

足下は余が無限罪苦の教理を棄て宇宙神教を眞正なる福音の希望として主張するに至りし理由(即ち決して余自から好んで爲さゞりしもの)を開陳すべしと要求せられたり、故に余は之を簡短に記述し且此大問題に關する英倫及蘇格蘭の現時の評論を附言すべし。

茲に記臆すべき事あり、余い今も例の如くナイシン信仰を奉する者の立脚地より立論すべし、實に吾人は吾人の主の神性よ重きを置くに從ひ益々我主が終に惡の爲めよ失敗を被ると云ふ事を理會し難からしむ(余は斯く思ふなり)此說は自著二百卅二及卅三頁の引證に示す如く頗る古代に於ても明に認知せられたる所なり。

余は余の簡短なる事跡を記述するに當り自から之を爲すを厭ふ所以

を告白すべし、何となれば自負の性質を帶ぶる者は必ず鋭敏明達の士をして厭嫌せしむるを免る可らざればなり、余の記する所は靜穩堅固なる事跡、連綿たる確信の發達にして而して只之に過ぎざるものなり。

余が從前の信條に就き始めて疑念を起せし以來恐らく既に三十年を經過せしゐらん、當時夫の地獄は實に恐怖すべく、實に殘酷に、實に不公平に見へしが、余は決して斯る感情を懷かざりき、斯る感情は自然に來りしも好遇せられざりしを以て速に消滅せり、但しそは消失せしも默々の裡に再現して問ふて曰く、良心が殘酷不德なりと斷定せし者を以て實に神の眞意なりと看做すを得べきかと、此等の早時の疑問は遙に余が知る所に過ぎしや疑なく、實に深く、其根底を構へ、是より漸々余の生活を形造する確信を來せり、此時常に――實に數年間――余は斷へず舊說を反復し毫も疑を增すとなく又重大なる討究に進まず況んや

意見の變化を促すとあらんや、然るに終に余の天職上に一破隙の來るあり、不健康は余を驅て外國に行かしめ瑞西の深林高山に於て充分討究すべき閒暇を得たるを以て、茲に舊時の疑念再發して更に激烈と爲り、始めて余に答辯を促したり。

余は書籍に乏しかりしがドクトル、コックス氏の「サルヴエートル、マンディ」を得たり、余は善く記臆せり其日インゲデインの平穩なる湖水の邊、松樹の蔭に息ひ、始めて其多望なる書を開き、其主張する大希望を沈思せり、此時四方を眺むれば万樹芽を出し花を開き恰も初夏の美貌を呈したり。

其後ジユーク氏の「萬物の復興」を得て、以上の兩書より自から研究し、又ユニヴオルサリズムを徵すべき數多の證據を聖書中に認むるに至れり、然れども兩書とも問題の宏大なるに適せず、大事件ハ實に危險中ニ在りて、ユニヴオルサリズムと神の目的又は救濟の全經綸との關係に乏しく、古代ニ於てユニヴオルサリズムの弘布せし歷史上の明證に乏しきか如し、此缺點ハ余か少くも自著に於て補修せんと欲せしものなり。

そは扨措き余の爲めに實に危機の來るあり、新光聖書を射りて新希望起り、舊來の障壁は滔々たる潮勢を遏むる能はず、此以一層大なる希望は余の確信に侵入したり、然れども余が針路を轉じて舊說を棄て新說(實は最古の說)を採りし時期は今日にても尙ほ精密ニ指示し難からん。通常神學の價値に就ては人々常に意見を異にす、余を以て見るに今日まで世俗信條に於て殘忍の意義を過重ならしむるものは其不正なるに在り、是れ神の如き者より人の如き者に對する凡ての公平を缺くと甚しきものなり。

故に余は啻正式上の、みならず眞實に口碑的信條を棄てたり、然れども此點に於て尙ほ學ぶべきもの甚だ多きことを余は告白せざる可らず。

余い惡人の刑罰い無限なりと云ふに非ずして罪は神法に從ひ無限に永續すべしと云ふ爭論の中心點を漸次ょ理會したり、幼時より斯る說に親炙せる讀者諸君は、殘忍なる敎系に訓練せられ無數の羈絆を以て束縛せられ連繫せられたる者の無知なるを怪しむ勿れ、實に余はォウガスチン以來西敎會が眞の立脚地を打棄てし所以、恩寵なき罪を中心の事實と爲し、萬物の父を變化して全能の州知事が其部下の吏員を指揮する如き者と爲せし所以、近世の神學者(監督バトラーの如き)が天父ょ就き只技師長の如き概念を有し即ち其受造物を敎育するに非ずして之を試驗する者と爲せし所以を明知する爲めょ數年を費したり。

斯く本題の主意を離れたるを赦せ、扨余は再ひ余の簡短なる物語に立歸らん、余い瑞西より(長く滯留の後)歸るや調子傾向とも全く一變したる確信を携へ來れり、余は閑暇の生活を得たるを以て引續き回想熟慮し、確信の潮流最早停止す可らざるに至りしかば終に之を發表するに至れり、余は書せざるを得ざるものを書せり、出版後余は更に熱心に研究を繼續したり、此點ょ於て余はドクトル、バルウ氏に負ふ所頗る多きを認めざる可らず。

英國博物館ょ於て余は偶々氏の「ユニヴォルサリズムの古代史」を繙き、爾來實際に諸敎父の著書を研究し、最初の世紀に於て(屢々最も廣き形狀を以て)ユニヴォルサリズムの大に弘布したる夥多の證據を蒐集するを得たり。

玆に一言すべき事は諸敎父の或嫉妬が屢々此事實の至大の意義ょ就き吾人を眩惑せしと是なり、即ち斯の時代に於てユニヴォルサリズム

の如き信條と最大なる學者に依り聖書の明白なる憑據を以て敎へられたり、眞に古代の組織的形狀に於る基督敎說は則ちユニヴォルサリズムとして、此神學の組織は、其神及人の高尙なる概念と、其高尙なる同情と、其眞理を包括すると、宗敎の本質にして永遠なるものを承認する事とに於て(余を以て見るに)他に比肩すべきものなし。

加之余の考ふる所に據れば尙ほ此組織は未來の神學を正しく形造して之を舊路に挽回せんとする一大事業を有せり。

余が所信を變せし物語ハ斯く舊來の信條を(倫理上の理由に於て)强く疑ふに起源し、其第二段は流俗の神學が文字通りに聖書より其高尙なる希望其最固有なる敎義を除き去る事を、漸次に、殆んと不本意なからも、承認するに至りたるに在り、第三段ハ最古時代に在て實に希臘文の聖書を自國語の如く使用せし人々の中よユニヴォルサリズムの弘く

傳はりしことを發見せしよ在り、而して余が信條の諸敎理を概括して之を一推測式に編成し(多分不完全なからも)救極の眞よ連續することを曉り、創造、成肉、贖罪、審判、復活等の諸階級を經て唯一の神及万物の父の一大救濟的目的を尋ねんとするに至り最後の階級に達したり。

余は喜んで一身上の疑問より轉じて英倫及蘇格蘭に於る感情の狀態に就き數言を述べん、吾人は一大宗敎改革の中央に在り、余ハ信ず吾人は緩徐堅固なる英國風を以て吾人の神學を改造しつゝありと、恐らく此經過は數々漸進なるを以て殆んど自から知覺せざるべしと雖も斷へず進行しつゝあるや疑なし。

今一例を擧ん「クリスチアン、ウォールド」なる宗敎新聞は我國にて最も廣く流布すれども、一層大なる希望」よ充分同情を表せり、其言ふ所の如何は苟も思想ある者容易に之を洞觀し得べし、若し敎會に眼を轉せば

監督の位地に在る最博學最有力の神學者中に廣濶なる希望の主張者(ダラムの監督)あるを見るべし、マンチエスターの監督亦同說にして其他一二人よ止まらざれども余い茲に公言せざるべし、又有名なる故監督ウキルバーフオルスも死せる前に、一層大なる希望に變說せり、暫時蘇格蘭を顧るに、國立敎會の一敎師は近頃の書信に於て人民の十分九い「一層大なる希望」を渴望せりと余よ保證せり。

此事い假令へ大に縮小せるとも尙ほ著明なる事跡なり、又今口碑的信條を辯護する者の變調と、敎會內にてユニヴォルサリズムに異端の如き語を適用するを殆んど全く廢止したるは何人も能く之を視察すへし、余の聞く所の討究又い同情なる文字に於て注意すべき二件あり、即ち第一、此文字は遠隔地方の諸部より來れり、第二、熱信敬虔謹愼なる心意より來れり、然れども吾人をして過激ならしむる勿れ、第一吾人は甚だ

靜に運動せり、第二許多の反對者あり、第三數多の同感者は怯懦なり、されど概して一大變化の方に行はれつゝあるは疑を容れざる所なり、然れども果して反動なきか、恐らくは之あらん、近世の思想と進步の下に橫はる力、當時の全く共和的なる運動等は一層廣大なる神學に左袒するものなり、余自身は確乎靜徐なる進步を好み、酵母の作用を注視し、今耳邊に囁く聲が漸次に屋上に揚言せらるべきを前見して滿足せり、夫の頑固なる不悔改者の滅亡を敎ふる學派に就き數言を附加せざる可らず、社會の多數は中性を喜ぶ者にして所謂オルソドキシーとユニヴオルサリズムとを等分せる說は其含有せる主義の如何を顧みず最も世に歡迎せらるいなり、然れども此派の神學よりは理會すべきもの少し、彼等は別に抵抗を受ざる形狀を以て害惡の勝利を敎へんと欲せり、但し茲に注意すべき要件あり、此敎義は舊來の信條を分離せんと盡力

する人々の間に頗る勢力あるを以て此紙上に於て宜しく之を認識すべし。

千八百九十一年　英倫ウエストン、スーペル、ミーア

トーマス、アリン識

明治廿六年六月十五日印刷
明治廿六年六月十八日發行

翻譯兼發行者　東京府士族　星野久成　東京市小石川區小日向水道端鳥取縣平民一丁目十四番地

翻譯者　吉村秀藏　仙臺市木町通七十六番地

印刷者　曲田成　東京市京橋區築地二丁目十七番地

發行所　宇宙神教出版所　東京市麹町區飯田町四丁目五番地

印刷所　東京築地活版製造所　東京市京橋區築地二丁目十七番地

70
87

020266-000-7

70-87

宇宙神教確論

トーマス・アリン/著

図版

M26

ABI-0071